

「ガブリエルの死」

ミシュレ『フランス史』におけるアンリ四世の愛妾の表象

坂本 さやか

(東京大学)

『フランス革命史』などの著書によって知られる19世紀の歴史家ジュール・ミシュレ(1798-1874)は、女性をめぐる問題に強い関心を抱いていた。歴史書においてジャンヌ・ダルク、革命家ロラン夫人、中世の魔女といった行動する女性を描く一方、フランス王アンリ二世の愛妾ディアンヌ・ド・ポワティエや革命家ダントンの妻といった歴史的人物の恋人・配偶者にも注目し、男性に深い影響を及ぼしたこれらの女性について多くの記述を費やしている。ミシュレは、アンリ四世の愛妾ガブリエル・デストレについても、1857年に出版された『フランス史』第11巻「アンリ四世とリシュリュー」の冒頭の2章において詳述しており¹、結婚して王妃となる夢を実現する一歩手前で非業の死を遂げた若き女性の運命を、伝説と史実を巧みに配した叙述によって辿っている。本稿では、ミシュレによるガブリエル・デストレの記述の分析を行い、ミシュレの先行研究において十分に論じ尽くされているとは言い難い、英雄的男性の恋人・伴侶としての女性の表象に関する考察を試みることにする。

ブルボン朝の創始者であり、宗教対立による内乱を制して王位についたアンリ四世は、フランス史の中でも最も人気の高い王であり、恋多き男性としても知られている。アンリ四世伝説が完成の域に達していた19世紀半ばにおいて、代表的な愛人であったガブリエルとの恋愛の逸話は、王の恋文やシャンソンを通して人々に親しまれており、結婚を控えたガブリエルの突然の死は、歴史の謎として知的関心の対象となっていた²。アンリ四世やガブリエルに関して書かれた当時の歴史書としては、ミシュレの著書に加えて、スイス人の経済学者・歴史家であるシスモンディによる『フランス人の歴史』(1821-1844年)の第22巻(1839年)、かつてサント=バルブ中学においてミシュレの同僚でもあった歴史家オーギュスト・ポワルソンによる『アンリ四世の治世の歴史』(1856年)などが存在する。19世紀を代表する批評家サント=ブーヴも、1853年に『月曜閑談』においてガブリエルの肖像を描いている³。これらの同時代の著作と比較して、ミシュレの叙述にはどのような特徴が見出されるのだろうか。

¹ Jules Michelet, *Œuvres Complètes IX*, éditées par Paul Viallaneix, Paris, Flammarion, 1982. 以下、この全集版9巻からの引用は本文中に括弧を開き、略号OCの後に頁数を示すこととする。

² アンリ四世伝説については、以下を参照：Christian Biet, *Henri IV*, Paris, Larousse, « La vie, la légende », 2000.

³ J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des Français*, t. XXII, Paris, Treuttel et Würtz, 1839; M. A. Poirson, *Histoire du règne de Henri IV*, Paris, Louis Colas et Cie, 1856; Sainte-Beuve, « Gabrielle d'Estrées. Portraits des personnages français les plus illustres du XVI^e siècle, recueil publié avec notices par M. Niel », lundi, 8 août, 1853, *Causeries du lundi*, t. VIII, Paris, Garnier Frères, s. d.

1. アンリ四世の女性をめぐる問題

第一の特徴として挙げられるのは、ミシュレがアンリ四世の女性をめぐる問題に与えた重要性である。シスモンディやポワルソンはガブリエルをそれほど重視しておらず、ミシュレ自身、ポワルソンの記述の不十分さを誇張して「ガブリエルに一行は少ない」(OC 241)と批判している。シスモンディ、ポワルソン、サント=ブーヴらは、基本的には王の恋愛を公務と切り離し、女性をめぐる問題を政治に対して二次的な問題と見なしている。この三者は、愛妾が王妃となることが社会的に不可能であり、アンリ四世は、ガブリエルの死によってそのような過ちを冒す危険を免れたと考えている点で、一致している。

それに対し、ミシュレはアンリ四世の女性をめぐる問題全般に焦点をあてつつ、すでに述べたようにガブリエルの問題に二章を費やしている。その背景には、まず、愛妾であるガブリエルとアンリ四世との結婚が政治的・宗教的に重要な意味を持つ選択肢であったと認めているという点があり、加えて、ミシュレが恋愛及び結婚の男性に与える影響を重視していることが挙げられる。ミシュレによると、ガブリエルとの結婚がかりに実現したならば、王家の婚姻政策において伝統的な慣習となっていた外国の王女との結婚を回避することが可能になる。そしてそれによって外国勢力、特に宗教戦争において排除されたばかりのスペイン・カトリック勢力がスペイン人または親スペインの王妃を通じてフランス国内に影響力をふるうことを妨げることができる。同時にガブリエルは、プロテスタントと近い関係にあったため、彼女との結婚は、ミシュレが近代的な推進力を見ていた新教勢力の保持に役立つと考えられている⁴。

次に、恋愛や結婚自体が男性に及ぼす影響の重視という点だが、ミシュレは、とりわけ変わり易い性質を持つアンリ四世においては、恋愛こそが「唯一の真に定まった点」(OC 39)であると述べている。サント=ブーヴが、ガブリエルらを相手にしたアンリ四世の恋愛を、似たような情事の反復としか見なしていなかったのに対し、ミシュレは、王の「最も軽率な気まぐれにおいても、心が関わっていた」と考え、さらに、恋愛が王の心を高めていたために、当時の社会風俗では一定の品位が保たれていたと見なしている。動かされ易い心を持つアンリ四世の結婚問題は、「少なくとも間接的に国家の命運に影響を与える」(OC 39)。結婚には至らなかったものの、ガブリエルも王の心をすでに支配しており、ミシュレは「國務諮問会議においてしばしば寝室の指令を発する」(OC 39)アンリ四世の姿を書き留めている。

2. ガブリエルとの恋愛をめぐる

女性に関する問題の重視と関連したミシュレの第二の特徴は、ガブリエルとの関係の理

⁴ ガブリエルの伝記については、以下を参照：Inès Murat, *Gabrielle d'Estrées*, Paris, Fayard, 1992 ; Benedetta Craveri, *Reines et favorites. Le pouvoir des femmes*, Paris, Gallimard, « folio », 2009.

想化であり、第三の特徴は、ガブリエルの叙述に与えられた象徴的性質である。こうした理想化や象徴化は、サント=ブーヴがガブリエルの伝説に対して行った脱神話化の対極にある。したがって以下では、比較・対照のためにサント=ブーヴの叙述の特徴や手法を概観し、次いでそれを踏まえた上でミシュレの第二、第三の特徴を論じることにはしたい。

サント=ブーヴによる恋愛の脱神話化

サント=ブーヴは、1853年8月8日の『月曜閑談』において、内務省の図書館員で芸術・歴史の愛好家ニエルの解説とともに出版された『16世紀フランスの最も著名な人物の肖像画』の批評に寄せて、ガブリエルの文学的肖像を描いている。サント=ブーヴの記述は多岐に渡り、ガブリエルの生涯、王との関係の進展、公の場での王妃然とした振る舞い、彼女の容貌や性格に加えて、贅沢な装身具、彼女に対するパリ市民の敵意、アンリ四世時代の偉大な政治家であるシュリーの彼女に対する評価などについても語っている。全体として、ガブリエルとの伝説的な恋愛を脱神話化する方向にある。サント=ブーヴは、このガブリエルをめぐる伝説について冒頭から留保を示している。すなわち、ガブリエルを「慕われた恋人の名前の数々」の中でも「最も人気がある」ものだと認めた上で、アンリ四世の人気の反映であるガブリエルの「いくらかロマネスクで好意的な伝説」が、半ばは真実であるが半ばは偽りであると述べている⁵。懐疑的な立場を取るサント=ブーヴは、伝説を形成するのに貢献した後世に伝わる手紙やシャンソンを引用しながらも、それらが歌い上げる王の感情の真正さや誠実さを問いに付している。

具体例を挙げるなら、ガブリエルの死の直後、アンリ四世は、妹カトリーヌに宛てた手紙の中で、「私の愛の根は死んでしまいました。それは再び生えてくることはないでしょう」と、ガブリエルへの愛の深さを示すと思われる言葉を書いている⁶。しかしサント=ブーヴはこの言葉を引用する一方で、アンリ四世がアンリエット・ダントラグを新たに愛人にし、同じ年の終わりには結婚の約束をしたことに触れ、「不幸なことに、ここでは必ずしも道徳が情念に勝ったのではなかった」と記している⁷。

次いでアンリがガブリエル自身に宛てた手紙が検討の対象となる。サント=ブーヴは、「人が手にするアンリ四世からガブリエルへの手紙は、真正のもののようなものである」と、アンリ四世の言葉の誠意を半ばは認めつつも、王が程なくアンリエット・ダントラグに宛てて書いた別の恋文との類似を指摘することで、唯一無二の愛を証立っているはずのガブリエルへの手紙の価値を引き下げる⁸。

王の感情の変わり易さ、ガブリエル宛の恋文とアンリエット宛の恋文の類似を確認した後、最後に批判考察の対象として残されるのは、王が愛人に贈った「かわいいガブリエル」というシャンソンだ。19世紀にまで伝えられたこのシャンソンは、ガブリエルの存在の伝

⁵ Sainte-Beuve, *op. cit.*, p. 396.

⁶ Inès Murat, *op. cit.*, p. 405.

⁷ Sainte-Beuve, *op. cit.*, p. 411.

⁸ *Ibid.*, p. 412.

説化に大きな貢献をした。サントブーヴは、このシャンソンの「残酷な別れ……」というリフレインの歌詞が古い流行歌からの借用であることを暴露することにより、シャンソンの文学的独創性を否定する。「ああ！何度同じ愛のシャンソンがこうして用いられることがあるのか！人はその名前だけを変えるのだろうか⁹。」サント=ブーヴは、シャンソンが固有名詞を変えただけの陳腐な借り物に過ぎないと結論づけて、彼の文学的肖像を締めくくっている。

このようなサント=ブーヴの冷淡な姿勢は、彼が豊富に引用する歴史的証言の中でも、政治家シュリーの証言に見られる立場を引き継いでいる。サント=ブーヴは、「われわれの思考をアンリ四世の忠実な僕しもべの視点に合わせよう、そこに何もつけ加えることも取り除くこともするまい¹⁰」と述べ、シュリーが回想録において語っている逸話、シュリーが同伴を務める旅の道中で、ガブリエルがあやうく馬車の事故において死にそうになったという逸話を紹介する。そして、その場におけるシュリーの考えを要約して言う、「結局のところひとりの女性が失われたに過ぎないということだ、そしてまた必要なだけ見つかるだろう¹¹」。サント=ブーヴは、「古いにしへのガリア人たちの流儀」を思わせるシュリーのこの考え方が「繊細」でも「騎士道的」でもないと留保を加えつつも、こうした慎重な態度によって一層効果的にこの政治家の恋愛に対する皮肉な見解に合理的な印象を与える。

ミシュレによるガブリエルとの恋愛の理想化

ミシュレといえどもガブリエル・デストレとの関係を必ずしも常に肯定的に描いているという訳ではない。特にガブリエルが最初に登場する『フランス史』10巻では、ガブリエルの最初の恋人であるベルガルドとの関係を揶揄し、ガブリエルがアンリに「実利的な性格を与え、彼を卑俗にし、鈍らせた¹²」とも書いている。しかし彼女の死が迫ってきた11巻に入ると、二人の恋愛を理想化し、ガブリエルの叙述に象徴性を与える方向に向かう。その際にミシュレもサント=ブーヴが引用したのと同じシャンソンや手紙を引いているが、解釈の仕方は異なっている。まずは恋愛の理想化について、ガブリエルの死後にアンリによって書かれた手紙への注釈を例に取り上げて検討する。

彼〔アンリ四世〕は、ほどなく表現力に富む次のような言葉を書いた、「私の心の根は死んでしまいました、もう二度と生えてくることはないでしょう。」

真実の言葉、とはいえ、巧みな者どもはやがて彼を新しい色事に再び取りかからせる方法を見つけたのだった。彼は、彼の人生そのものである情熱を、辛辣な言葉や興奮、驚嘆の感情を通して取り戻した。だが、それはもはやガブリエルではなかった、彼の心が安らぎを得たあの愛の十全たる味わいではなかった。(OC 57)

サント=ブーヴも同じ手紙を引用しているが、ミシュレの引用では、言葉が変わっている。

⁹ *Ibid.*, p. 412.

¹⁰ *Ibid.*, p. 404.

¹¹ *Ibid.*, p. 405.

¹² Jules Michelet, *Œuvres Complètes VIII*, éditées par Paul Viallaneix, Paris, Flammarion, 1980, p. 449.

正しくは「私の愛の根は死んでしまいました」であり、手紙の中ではこの「愛の根」はアンリ四世が手紙の相手である妹に対して抱いている「友情の根」に対置されている。ところがミシュレは記憶違いからか「愛の根」を「心の根」と書いている。恐らく意図的ではなかったであろうこの書き間違いの結果、ミシュレの文章においては、ガブリエルの死の衝撃は、あらゆる感情の源とされる「心」の根の死をアンリ四世にもたらしたことで、より深刻な意味を帯びることになる。

ミシュレは「心の根は死んでしまいました」というアンリ四世の言葉を「真実の言葉」と見なし、加えて、ガブリエルのことをアンリ四世が今後二度と得ることがないであろう「彼の心が安らぎを得た愛の十全たる味わい」に喩えることで、二人の恋愛に唯一無二の特別な意味を与える。

3. ガブリエルの叙述が帯びる象徴的性質

次にミシュレの第三の特徴である、ガブリエルの存在と彼女の運命に与えられた象徴的性質の問題を検討しよう。ミシュレの描く人物、とりわけ女性が帯びる象徴性については、すでに多くの先行研究が指摘するところだが、ここではそれらを踏まえた上で、ガブリエルの描写においてどのような形で象徴化がなされているかに注目したい¹³。ミシュレはまず、第11巻第1章の冒頭の部分において、シャンソンや肖像を喚起しながら、ガブリエルを内戦後の来るべき平和なフランスにおける繁栄の象徴として提示する。次いで、第2章において陰謀の犠牲となり民衆やカトリック勢力の誹謗中傷の的となって断末魔の苦しみに悶えつつ死んでいくガブリエルの姿を通して、和平の夢が破れるさまを描きだす。これらの記述を順を追って分析することにしたい。

「かわいいガブリエル」

私たちはすでに、サント=ブーヴがこの「かわいいガブリエル」のシャンソンのうちに、固有名詞を変えただけの流行歌の使い回しを見出したことを確認した。第一章冒頭で真っ先にこの歌に言及するミシュレは、サント=ブーヴとは異なり、歌の中に王のガブリエルに対する情愛のみならず、当時の社会が共有していた和平の喜びの表現をも認めている。

ミシュレはまず、この有名なシャンソンをめぐって人々が抱く幻想を覚ますために、歌が作られて送られた当時の状況に関して説明を加える。この「愛の嘆き歌」(OC 37)の歌詞の内容は、ガブリエルを残して戦争にでかけなくてはいけないアンリ四世が「残酷な別れ」(強調原文)を嘆くというものだ。ミシュレは、この歌が、「人が言ってきたように、戦争への出発の際に作られたのではなく、反対に帰還、しかも和平の二週間後に作られた」と述べ、さらに、実際にアンリ四世がガブリエルに歌を贈った時期も、アンリ四世とガブ

¹³ Jean Pommier, *Michelet, interprète de la figure humaine*, London, University of London, Athlone Press, 1961, p. 47 ; Jeanne Calo, *La création de la femme chez Michelet*, Paris, Nizet, 1975, p. 42, p. 180.

リエルの間の「二人目の息子の出産による短い別離」の際であると説明する。加えて、シャンソンの作詞にアンリ四世がどれくらい関わったのかという点についても、「私は口述したけれども、整えてはいない」というガブリエル宛の手紙でのアンリ四世自身の率直な告白に注意を促すことにより、詩人としての王を美化しないよう留意している。このように当時の状況のある程度明確にした上で、ミシュレは、この歌を、詩としての出来よりもむしろそこに表現された感情の真理によって評価する。

歌詞はあまり詩的ではないけれど、真実の感情、もはや苦しむことのないであろう痛みの愛すべき思い出を、どうにか韻文で表している。それは和平が最初にもたらす愛らしい感情だ。親類であれ、友人であれ、恋人であれ、とにかくとうとう再び一緒になり、もう二度と別れることがない。残酷な別れはもうなく、各人が愛するものについて安心できる。その微笑みは、涙を交えて、いまだ過去の方を向いている。(OC 37, 強調原文)

ミシュレは、このシャンソンが、アンリ四世個人のガブリエルへの感情を表現しているだけでなく、離ればなれの者どうしが和平を迎えて再会を喜ぶという当時のフランス人が分ち持っていた共通の感情と一致するところを重視し、それによってこのシャンソンに象徴的性質を認めている。同時に、ミシュレは「旧教同盟の惨禍の後の平和が発するあの柔らかな光線」であるこの「ガブリエル」のシャンソンが、アンリ四世の名前とともに「かつての君主制」が人々に残した数少ない思い出であることを指摘している。そしてアンリ四世の伝説の一部をなしているこのシャンソンが、過去の歴史に実在した「真実の感情」を後世に伝えていることを確認している。

「ふくよかな七年」

ガブリエルの名前はこのように歴史的記憶と結びついて人々の心に残るが、それは彼女が人間味溢れる王であるアンリ四世の代表的な恋人ないし伴侶であり、カップルとして当時のフランスを象徴する存在となったからに他ならない。ミシュレも叙述において二人を対比することにより文学的な効果をあげている。ガブリエルのデッサンをめぐり以下の描写は、ミシュレにおける女性の象徴の例としてよく引かれるものだが、ここでもアンリ四世との関係や対比に注目する必要がある。

問題となるガブリエルの描写に先立って、ミシュレは、アンリ四世の手紙を引用しており、この王のうちに、和平を喜ぶ民衆やフランス全体の考えを述べる代弁者を見ている。和平が調印された3日後、アンリ四世が、郷土のベアルン地方の太った鷺鳥を送ってよこすよう書いた手紙について、ミシュレは次のように述べている。「アンリ四世は平和を信じ、民衆の苦しみを和らげることを期待し、幸福、豊穡さを夢見ていた。手紙の中では彼は人間そのもの、自然そのもので、素朴にその当時の考えを語っている。」(OC 37)さらにミシュレは、フランスの声となって語り、「痩せて敏捷」で、若々しい精神を持つアンリ四世を、「現実的」で「二十六歳ですすでに肉づきのよい」ガブリエルと並べ、「彼とガブリエルの間の対照」の「完璧」さに注意を促す(OC 38)。以上の対比に続くのが、彼女の肖像

画を喚起する一節だ。ミシュレは、彼女の若い頃のデッサンと死の直前のデッサンを比べながら、後に描かれたふくよかなガブリエルの姿に、来るべきフランスの繁栄の「前兆」を見出す。

彼女の最後の肖像となるデッサン（図書館〔現フランス国立図書館〕のデッサン）では、彼女の顔は百合と薔薇の誇らしげな花束のように輝いていた。ほっそりしたお嬢さん（サント・ジュヌヴィエーヴ〔図書館〕のデッサン）にさようなら。これは奥方、母、しかも大柄なヴェンドームたちの母だ。まだ王妃でないにしても、平和の王の愛人、痩せた七年に続くはずだったふくよかな七年の前兆、その輝かしい先触れである。だがその黎明はほとんど見られることはなかった。（OC 38, 強調原文）

このように、アンリ四世の声に、フランス人の求める豊かさの夢の表明を読み取ったミシュレは、その欲望の対象である愛人ガブリエルの身体に、その夢の実現である来るべき繁栄を体現させるという象徴的な役割を割り当てている。

「ガブリエルの死」

続く第二章は「ガブリエルの死」と題され、文字通り、王妃になる一歩手前で息絶えるガブリエルの最期を扱っている。ミシュレは、復活祭の間にパリに一人残された妊娠中のガブリエルが周囲の共謀のもとに暗殺される様子を密に構成された叙述を通して描いている。

ガブリエルとの結婚にまつわる政治的・宗教的次元についてはすでに触れたが、ミシュレはそれゆえに、ガブリエルの死が、カトリック陣営やそれと関係を持つ人々にとっての利益になると考えていた。同時代の他の歴史家たちがガブリエルの死因について明言を避けるのに対し、ミシュレは陰謀による毒殺説を支持している。

中でも特筆すべきなのは、カトリック勢力との対立関係である。毒殺に直接関わったかどうかは別としても、ミシュレはカトリックの聖職者たちの説教や彼らに煽動された信心深い民衆の噂などにおいて、プロテスタントから改宗したばかりのアンリ四世の愛人関係が非難・攻撃にさらされ、神の天罰の予告がなされる様子を細かに描いている。毒によって見るもおぞましい容貌となった瀕死のガブリエルの姿は、不品行を罰する「神の手」や「悪魔」の仕業を示す光景として解釈され、さらにその解釈は、ガブリエルの死に関与したり彼女を見殺しにした人々によって都合良く利用されることになる。こうした経緯を語りながら、ミシュレは、ガブリエルを、単に権力闘争の犠牲者としてのみならず、組織化されたカトリック教会の反動的な言説の犠牲者としてとらえている。

王とも引き離され、孤立状態に置かれた瀕死のガブリエルの描写において、ミシュレが強調するのは、毒に苦しみながらも闘い続けたガブリエルの生命力とその死闘の長さだ。

「それは長くかかった。体力の盛りに、激しくも絶望的な生きる欲求に突き動かされ、彼女は四十時間戦い、発作、激情、経過の改善、残酷なぶり返しを経験した。」（OC 54）苦しむガブリエルの身体の抵抗の激しさとその粘り強さは、その間に手紙で助けを求められ

たアンリ四世が彼女に会いにパリに向かうのを周囲の人々が妨げる経緯と並行して描かれることにより、一層強調されている。アンリ四世は、彼女が死んだという周囲の言葉を鵜呑みにし、パリを目前にしながらも馬車でフォンテーヌブローへと連れて戻されてしまう。

そして彼はパリに背を向け、まだ生きていた女性の死を悲しんだ。

彼女は生きていた。もし彼が執拗に食い下がったのなら、彼は彼女に再会し、彼女の最後の言葉を聞き届け、裁きを行うことを約束したはずだ。(OC 55)

加えて注意したいのは、ミシュレが、ガブリエルの所有する王妃のみが手にすることのできる象徴的な徴や品々を描き込んでいるという点だ。彼女のためには「王妃の色」である深紅の婚礼衣装が準備される一方、アンリ四世は「奇妙な贈り物」として、戴冠式において「『彼〔アンリ四世〕がフランスと結婚した』際の指輪」を彼女に与えている。そして死後、ガブリエルは、伯母によって「王妃のみに固有の装飾」である「金の組紐」のついた飾り寝台〔貴人の葬儀用の告別礼拝用寝台〕の上に横たえられる。王妃の装いをまとったガブリエルの姿は印象的な形で喚起されている。

実にきらびやかな装いと、一月も前から死んでいたと思うようなこのおぞましい顔のなす、残酷な対照。扉は開いていた。二万人の人々がそこに来て、寝台の近くを次々と通って行った。幾人かの人々は心を打たれ、祈りを唱えた。多くの人々がこの謎について想いをめぐらし、数々の推測をした。(OC 56)

ところでこの死せる王妃という主題は、14世紀にポルトガルの王子と結婚したイネス・ド・カストロの逸話によって、フランスのロマン主義においてもひとつのトポスとなっている。ポルトガルの王子ドン・ペドロは、愛人であったイネスと秘かに結婚するが、1355年に父親である王に彼女を殺された。後にドン・ペドロは彼女の亡骸を王妃のように大理石の墓に安置する。当時のフランスでは、トゥルバドール派の画家フォルバンが1812年に「死後に王冠をかぶせられたイネス・ド・カストロ」と題した絵画を発表している。

ロランス・リシェも指摘するように、ミシュレは、1835年のアキテーヌ旅行で修道院を訪れた際に、「フォルバン氏が、勝ち誇るイネス・ド・カストロの亡骸の発掘を修道院に配したあの美しい絵画」について思い出している。また中世史や最初の妻ポーリーヌの死について語る日記においても彼女について言及している¹⁴。ロランス・リシェによると、イネス・ド・カストロは、ミシュレにとって「官能的で醜悪な死のイメージ」を表しており、とりわけ、男性が死んだ女性に対して向ける慰められることのない激しい想いと結びついて¹⁵。したがって「一月も前から死んでいたと思うような」ガブリエルの姿は、このポルトガル王妃の姿を思い起こさせたはずである。しかし、死後に王妃のしるしをまわされる王の伴侶という点までは一致するイネスとガブリエルの話も、死後の裁きという点では異なる。ドン・ペドロが王となった暁に妻の殺人者たちに復讐を行うのに対し、アンリ四

¹⁴ *Journal I*, édité par Paul Viallaneix, Paris, Gallimard, 1959, p. 178, p. 385.

¹⁵ Laurence Richer, *La Cathédrale de feu. Le Moyen Âge de Michelet, de l'histoire au myth*, [Saint-Cloud], Éditions Palam, 1995, p. 195.

世は殺された婚約者のために仇を討とうとはしない。アンリは3ヶ月の喪に服し、ガブリエルの死を悼んで盛大な葬儀を催すが、他方でこの出来事を喜ぶ周囲の「意見の一致に驚き」、死後の捜査を行わないで謎を曖昧なままに残してしまう。

それでは、断末魔の様子を細かく語るにより、ミシュレはガブリエルの死にどのような意味を与えているのだろうか。叙述に描き込まれた王妃に固有の品々が暗示するように、ミシュレにとってガブリエルの死は、王妃になるはずだった女性の死を意味している。そして同時に、ポール・プティティエも指摘するように、フランス人である彼女との結婚によって実現したかもしれない政治的可能性や平和の夢が消え去ってしまったことをも意味する¹⁶。ミシュレは、その後、トスカーナ出身の王妃マリ・ド・メディシスのもとで、宮廷がアンリに敵対的な陰謀の場となり、同時に反動的なカトリック勢力がフランスで勢いを増す過程を描いている。最期声を聞き届けられることのないまま、権力闘争の犠牲となり、息絶えたガブリエルの身体、婚礼の指輪によってフランスの国土と同様にアンリ四世に結びつけられるはずだったガブリエルの身体の苦悶は、不確かな王政のもとに置かれたフランスが払うべき犠牲の象徴だったのではないだろうか。

結論

本稿では、サント=ブーヴを中心とする当時の歴史家との比較のもとに、ミシュレによるガブリエル・デストレの表象の特徴を探ってみた。ミシュレは、ガブリエルとの恋愛を政治問題として重視し、彼女とアンリ四世との恋愛を理想化しているという点で、他の歴史家たちとは対照的だった。ガブリエルの表象に与えられた象徴性もミシュレ独自の特徴となっていた。シャンソンを通じて歴史的記憶に留められているガブリエルを、ミシュレはあくまでアンリ四世の伴侶としてとらえ、彼女の身体をフランスが迎えるはずだった繁栄の前兆として示すと同時に、王妃になるはずだった彼女の辿る壮絶な運命を通して、君主制フランスの抱える危うさをも描き出しているのだ。

¹⁶ Paule Petitier, préface de Jules Michelet, *Histoire de la France XI*, [Sainte-Marguerite-sur-Mer], Éditions des Équateurs, 2008, p. XII.

« La mort de Gabrielle »

La représentation de la maîtresse d'Henri IV dans l'*Histoire de France* de Michelet

Jules Michelet, connu pour l'*Histoire de France* et l'*Histoire de la Révolution française*, s'interroge sur le rôle historique des femmes. Il s'intéresse non seulement à une femme héroïque comme Jeanne d'Arc mais aussi à une maîtresse ou une épouse influente du personnage historique comme Diane de Poitiers, favorite d'Henri II. À celle d'Henri IV, Gabrielle d'Estrées, il attribue les deux premiers chapitres du tome XI de l'*Histoire de France* ; en citant par endroits des mots et des images légendaires dans son récit, il retrace le destin tragique de la jeune femme qui a subi une mort douloureuse sans réaliser son rêve de devenir la reine. Cet exposé essaiera d'analyser la description de Gabrielle d'Estrées par Michelet et de réfléchir sur la représentation de la maîtresse ou la compagne d'un héros national, aspect qui n'est pas suffisamment étudié par la critique micheletienne. Fondateur de la dynastie des Bourbons et monté sur trône après les Guerres de Religion, Henri IV est un des rois les plus populaires de l'histoire de France. La légende d'Henri IV atteint sa perfection au milieu du XIX^e siècle : l'épisode de Gabrielle d'Estrées reste célèbre grâce aux chansons et aux lettres d'amour écrites par le roi ; le mystère de la mort violente de la femme à la veille de son mariage attire la curiosité des savants. À l'époque de Michelet existent comme travail historique sur Henri IV les ouvrages de Sismondi et de Poirson ; Sainte-Beuve trace de sa part un intéressant portrait de Gabrielle. En comparaison avec ces textes contemporains, quels sont les traits caractéristiques du récit de Michelet ? Il faut d'abord noter l'importance accordée à la question de la relation avec les femmes chez Henri IV. Alors que Sismondi et Poirson, tout en faisant remarquer l'inconvenance de la mésalliance, considèrent la question de l'amour et du mariage comme secondaire par rapport au problème de la politique et de l'office public, Michelet voit dans cette question un enjeu politique et religieux de la France à la fin du XVI^e siècle. Il idéalise ensuite la relation avec Gabrielle d'Estrées : à l'opposé de Sainte-Beuve qui, en imitant l'exemple de Sully, démystifie l'amour entre le roi et Gabrielle, il poursuit le travail de la mythification en citant une lettre d'Henri IV et la chanson dédiée à Gabrielle qui ont contribué à former la légende. La troisième particularité de Michelet consiste dans un caractère symbolique que prend le sort de l'héroïne dans l'ensemble de son récit. L'historien fait de la figure de Gabrielle où le roi a trouvé son repos un « augure des *sept années grasses* » qu'aurait vu la France après la guerre civile. Par cette dimension politique, légendaire et symbolique, Michelet accorde à la représentation de Gabrielle un intérêt à la fois historique et littéraire.

Sayaka SAKAMOTO, Université de Tokyo